

## 24 『ウイリアム・ウイリス文書』に

## みるW・ウイリスの医学教育

小宮山 道 夫

ウイリアム・ウイリスは、幕末・明治初期の日本の医学界を語る上で重要な人物である。文久三（一八六三）年にイギリス公使館付の補助官兼医官として来日して以来、明治十四（一八八二）年に最終的に日本を去るまで、彼は日本医学の近代化に少なからぬ貢献を果たしたといえる。

鳥羽伏見の戦いや奥羽戦争に従軍した折には戦傷者の治療で絶大な評価を受け、東京大学医学部の前身ともいえる医学校兼大病院に勤務して、医学教育を担当したこともあった。その後の日本医学がドイツ医学に傾斜することもあり、彼の活躍の場は限られることにはなるが、鹿児島にわたった後も鹿児島の医学のみならず、日本の医学の近代化に影響を与えたことは疑うことはできない

であろう。このことは彼の教え子であり、日本で最初の医学博士となった高木兼寛の活躍を見てもうかがい知ることができ、「彼の功績の大きい割りに、この名前を知っている人は非常に少ないようだ」とは『英医ウイリアム・ウイリス略伝』を著した佐藤八郎氏のことばであるが、これが医学史上におけるW・ウイリスの位置づけを物語っているといえるようである。

ところで昨年五月、このウイリアム・ウイリスの私信を中心とした関係文書『ウイリアム・ウイリス文書』（以下ウイリス文書）が横浜開港資料館において閲覧できるようになった。資料点数は六七八点にもぼる大資料群である。この資料はもと萩原延壽氏が、ウイリアム・ウイリスの血縁者である、アームストロング・ウイリス夫人より直接譲り受けたものである。これが近年、萩原氏の意向により、ウイリスゆかりの地、鹿児島へ寄贈されることとなった。原資料は鹿児島県歴史資料センター黎明館に所蔵されることになり、資料整理の実務に携わった横浜開港資料館にその写しが残された。この資料群の複写を製本して公開されたのが『ウイリス文書』である。

このような経緯で、この資料は現在横浜開港資料館において閲覧が可能となったのである。

萩原氏は昭和五十一(一九七六)年十月十二日より『遠い崖』と題する記事を朝日新聞夕刊に連載したが、その中でこの資料も使用されている。この記事は平成二(一九九〇)年十二月二十五日まで続き、通算一九四七回にもわたっている。そしてこのうちの一部分が『遠い崖 アーネストサトウ日記抄I』として既に刊行されている。この単行本の題名からもわかるように、この記事はアーネスト・サトウを主人公に書かれたものである。ウィリスがサトウの親友であった関係から、かなりの紙幅をさいて扱われてはいるが、『ウィリス文書』自体の膨大さを考えると、萩原氏がウィリスの記述に際して、執筆分量を自制されたことは想像に難くない。

ウィリスの業績は、その後の日本の医学の流れから見れば傍流に当たたる業績なのかもしれない。しかし、ともすれば見逃されやすい事柄に対して、顕彰の眼差しではない、検証の眼差しをむけることは、その時代を理解する上で非常に重要な前提条件であると考えられる。この

意味からも、日本の医学の現状を目のあたりにしていたウィリスが、日本の医学教育についてどう考えていたのかということは非常に興味深い事柄である。今回はこの『ウィリス文書』のうちウィリスの医学教育に焦点を当て、主に鹿児島時代の書簡をもとに考察を行う。

(広島大学五十年史編集室)